

食をめぐる政治的関心とその変遷

運動としての「有機」から「オーガニック」へ

東京国際大学 柄本三代子

1 目的

健康・環境リスクへの関心に端を発したともいえる有機農業は、その後社会運動と接続していった。その関心は、より安心なものを食べる／作るという個的経験にとどまらず、食のリスクをめぐる政治的背景への気づきであり、社会のさまざまな問題に取り組むことが意識されていた(Guthman 2014)。その後「有機」は、批判対象でもあった政策に取り込まれるなど「オーガニック」として明確に経済成長の一端を担う産業であることが期待され、新しい市場を開拓するものとして位置づけられるようになった。この変遷へのグローバル企業の寄与も大きい。以上のことは、消費社会に対する批判的視点もまた、時を経て消費社会に取り込まれていく過程と説明可能であるし、政治的関心剥奪の一過程とも理解可能だろう。本報告は、今日的食のリスクや危機状況をめぐって、今後いかに批判的まなざしを共有できるのか、という議論のために必要な前提を提示することを目的とする (Counihan & Siniscalchi eds. 2014, 柄本 2016)。

2 方法

(1)食とリスクに関してどのような配慮のもと消費を行っているか、家族構成や年収によって割り付けたグループインタビュー調査を行う。(2)政策／政府広報を含む言説の多層性について分析対象とし、「有機」が政策に取り込まれていく過程について検討する。(3)すでに有機農業を営む人々、および比較的若い新規就農者へのインタビューにより、実践的行為としての「有機」の社会的意味を明らかにする。(4)「オーガニック」消費に関するフィールドワークを行う。

3 結果

食への関心に政治的なものが含まれるか否か、あるいは「オーガニック」への消費動機の有無は、経済状況に依存する。一方で「有機」は確実に政策へ取り込まれ、たとえば2020年東京オリンピックでも有機野菜の導入が課題としてあがっている。有機農業への動機は脱工業化・脱商品化にもとづくものでありつつ、たとえば「マルシェ」といった新しい価値(記号)の下の消費による存続も期待されている。オーガニック消費の場において、政治性払拭が重要であり、したがって政治的関心の発露というよりもむしろ、私生活へと閉じた価値の提示に貢献している。

4 結論

食とは消費文化の主たる構成要素でありつつ、さまざまな立場からの政治的関心が萌芽する場である。＜新しい価値の提示＞と＜政治的なもの＞の接続／分断状況について明らかにすることで、＜消費社会に対する反逆＞もまた消費対象へと変換される事態を理解しつつ、食の今日的状況に対するクリティカルな関心の共有可能性について検討することが重要であることを確認する。

文献

Counihan, Carole & Valeria Siniscalchi, eds, 2014, *Food Activism: Agency, Democracy and Economy*, Bloomsbury.

柄本三代子, 2016, 『リスクを食べる——食と科学の社会学』青弓社.

Guthman, Julie, 2014, *Agrarian Dreams: The Paradox of Organic Farming in California*, Second Edition, University of California Press.

本報告はJSPS 科研費基盤研究(C)「健康・環境リスクをめぐる不安言説分析」(24530598)、および同「健康と食の『リスクをめぐるコミュニケーション』に関する実証研究」(16K04038)の助成を受けている。